

2012年7月26日／浪宏友ビジネス縁起観塾

## 創造と調和の人生

資料：庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』（佼成出版社）「化城論品」

### 1. 化城論品の概要

- (1) 大通智勝仏の故事
- (2) 化城宝処の譬え
- (3) 以上を、偈で繰り返す。

### 2. 大通智勝仏の故事

- (1) はるかな昔、大通智勝仏が悟りを得ました。
- (2) 大通智勝仏が出家する前に十六人の子どもたちがいました。子どもたちは大通智勝仏のもとに行き、教えを説いてくださいとお願いしました。
- (3) 十方に神々がいました。大通智勝仏が世に出られたことを知って、大通智勝仏のもとにかけつけ、教えを説いてくださいとお願いしました。
- (4) 大通智勝仏が教えをお説きになりました。
- (5) 大通智勝仏が禅定にお入りになりました。
- (6) 十六人の菩薩たちが、それぞれ人々に向かって教えを説き始めました。
- (7) 十六人の菩薩たちは、その後何度も生まれ変わりながら教えを説き続けました。
- (8) それぞれの菩薩から教えを聞いた人々は、それぞれの菩薩の生まれるところに共に生まれて教えを聞き続けました。
- (9) 十六人の菩薩たちは、長い間修業して、仏の悟りを得ました。現在はそれぞれの国土で教えを説いています。
- (10) 釈迦牟尼世尊も十六人の菩薩の一人です。娑婆世界で仏の悟りを得て教えを説いていらっしゃいます。
- (11) 釈迦牟尼世尊の説法の座に居る人々や、これから釈迦牟尼世尊の教えを聞く人々は、ずっと昔から菩薩の生まれるところに生まれて教えを聞き続けてきた人々です。

### 3. 化城宝処の譬え

- (1) けわしい道

あるところに、ひじょうに長い、けわしい、困難な道がありました。そこは人里遠く離れており、わるい獣などが出没して、まことに恐ろしい場所です。

## (2) 旅をする人々

ところが、このけわしい道を、珍しい宝を求めて旅をつづける、おおぜいの人がありました。

## (3) リーダー

一行のなかに、ひとりのリーダーがいて、その人は智慧もすぐれ、ものごとに明るく、この道がどうなっているかを、先の先までよく知っていました。

## (4) 疲れ果てた人たち

一行のなかには、足弱な人もあれば根気のない人もいて、途中ですっかり疲れはててしまい、リーダーにむかって「わたくしたちは、くたびれきってしまいました。それに、この道はなんだか恐ろしくて、もうこれ以上いく気になれません。先はまだ遠いことですし、いまから引き返したいのです」といいました。

## (5) 幻の城で休息する

このリーダーは、時と場合に応じて適切に人々をみちびく方法（方便）をよく知っていましたので、心のなかで—— ああ、かわいそうな人たちだ。どうして、もうひと息の所にある大きな宝をあきらめて、引き返そうとするのだろう。もうすこしのしんぼうなのに—— とおもい、方便の力をもって、そのけわしい道の半ばよりちょっとむこうに、ひとつの大きな城を幻としてあらわしたのです。そして、一同にむかって、「みなさん。もう恐れることはありません。また、引き返すこともありませんよ。あの城のなかにはいつてゆっくりしなさい。あのなかにはいりさえすれば、すっかり安穩になります」といいました。

みんなは大喜びでそのなかにはいつて休息しました。

## (6) ふたたび旅にでる

しばらくして、つかれがすっかり癒えたのを見ましたリーダーは、その幻の城をけしてしまい、「さあ、ゆきましょう。宝のある場所はもうすぐそこです。いままでここにあった城は、じつはわたしが仮りにつくったものです。ここでひと休みして、心をとりなおさせるための方便だったのです」

こうして一同をはげまし、さらに宝のある場所へとみちびきつづけたのでした。

## 4. 譬えの表面の意味

## (1) 修業の目的

旅の目的はただひとつ、宝のある場所へいくことです。長くけわしい道は宝のある場所に通じています。

修業の目的はただひとつ、仏の智慧を得ることです。仏の智慧に通じる修業の道を「仏乗」といいます。

## (2) 一仏乗

釈迦牟尼世尊の説く修業の道はいろいろあるように見えても、すべて「仏乗」です。

修業の道は、唯一、仏乗だけであるということを、「一仏乗」と言います。

## (3) 方便もまた真実

幻の城をあらわしたのは方便です。幻の城をあらわした場所は宝の場所に通じる真実の道の上です。真実の道の上にあるから、方便（正しい方法）なのです。

修業の道は、人によって様子が異なります。それでも、仏の境地に通じる真実の道の上であればいいのです。これが方便であり、一仏乗の道なのです。

## 5. 人生苦

### (1) 人生は苦しみの連続

長いけわしい道というのは、われわれの人生の旅路です。その旅路には、つらいことや苦しいことが、つぎつぎに起こります。だれでも、それを克服しようとするのですが、なかなかおもうようにゆきません。すると、たいていの人があきらめをもつようになります。

### (2) 人生苦にうち負ける

人生苦にうち負けて、人間としての自然の道、正しい生きかたを忘れ、途中で立ち止まったり、あとへ引き返そうとするのは、人間としての価値をみずから投げ捨てることになります。

### (3) 人生の意義を見失った人の例

次のような人々は、人生苦に打ち負けて、人生の意義を見失った人々です。

- ① 「あがいてみてもしようがないから、なんとか苦しみと苦しみのあいだをすりぬけながら、できるだけ楽しく一生を送ろう」などと、消極的な考えかたにおちいり、進歩への努力をあきらめ、安易な生活態度に逃避してしまう人々。
- ② 「どんなことでもして、太く短く一生をおくろう」などと考え、悪の世界へ踏み込んでしまいかねない、道徳心のうすい人々。

## 6. 正しい生きかた

### (1) 人間としての自然の道

つらいことや苦しいことがつぎつぎに起こるなかでも、たえず進歩していくのが人間としての自然の道であり、正しい生きかたです。

### (2) 釈迦牟尼世尊の努力

釈迦牟尼世尊は、人々が、人間としての自然の道を歩むことができるように、正しい生きかたができるように、人々の心や状態に応じて、教えを説き続け、導き続けてきたのです。

## 7. 現象にふりまわされるな

### (1) 釈迦牟尼世尊の教え

目の前にあらわれているいろいろな現象は仮りのあらわれにすぎないのだから、それにとらわれて心をふりまわされないようにすれば、つねに安らかな心境におられるのだ。

### (2) 「仮りのあらわれ」とは

あらゆる現象は仮のあらわれであると言われるのは、次のような理由からです。

① あらゆる現象は、原因・条件・結果・影響の原理によって作りあらわれています。原因と条件の関係が変われば、結果・影響もどんどん変わっていきます。

その意味で、仮のあらわれです。

② あらゆる現象は、他の現象と比べて、大きいと言われたり、小さいと言われたりします。比べるものが異なれば、評価も変わります。

その意味で、仮のあらわれです。

③ 一人一人の人は、それぞれ現象上の本体です。現象上の本体は、多くの要素が集まってできています。要素の集まり具合が変われば、現象上の本体も変わっていきます。

その意味で、仮のあらわれです。

### (3) 現象へのとらわれ

① 自分に心地よいものは、手に入れたいと思い、手離したくないと思います。このために、心地よいものに心を奪われます。これがとらわれのひとつです。

② 自分が忌み嫌うものは、近づけたくないと思い、排斥したいと思います。このために、忌み嫌うものに心を奪われます。これもとらわれのひとつです。

③ 自分のこの体、この心に対する深い執着心があります。これは、根本的なとらわれで、ここから具体的なとらわれの心が起きてきます。

### (4) 「とらわれて心をふりまわされる」とは

① 目の前の現象が変わらずにずっと続いてほしいと思っても、どんどん変わっていってしまいます。これを、変わっていかないように押さえ込もうとしたり、変わっていくのを追いかけてりして、心をふりまわされます。

② 目の前の現象が早く変わってほしいと思っても、なかなか変わらないことがあります。これを早く変えようとして無理に働きかけたり、変わらないことに不平不満を持ったりして、心をふりまわされます。

③ 目の前の現象は、大きいものの前では小さく、小さいものの前では大きくなります。これを、いつでも大きくなければだめだとか、いつでも小さくなければいけないと思ったりして、心をふりまわされます。

## 8. ほんとうの人間らしい生きかた

### (1) 創造と調和の生活

「ほんとうの人間らしい生きかた」とは、「創造と調和の生活」を営むことです。

### (2) 創造とは

「創造」とは自分の性格に応じ、才能に応じ、職業に応じて、「自分をも、他人をも、世の中全体をも、しあわせにするものごと」を作り出すことです。

### (3) 調和とは

「自分・他人・世間」が、互いに生かされ合い、生かし合いの関係にある状態が、調和している状態です。

### (4) 自分の存在価値

「自分・他人・世間」の調和のために、創造のはたらきをしている自分には、存在価値があると言えます。

自分の存在価値を発揮しているときが、自己実現をしているときです。

【参考】結願の文

経文

「願ねがわくは此この功徳くどくを以もつて 普あまねく一切いっさいに及およぼし 我等われらと衆生しゅじょうと 皆みなとも共にぶつどう仏道じょうを成ぜんぜん」

現代語訳

「わたくしどもの願いといたしますところは、この功徳をあまねく一切のものにおよぼし、わたくしどもすべての衆生が、みんなおなじように仏の境地にたっしたいということでございます」

1. 「わたくしども」とは

この経文は、大通智勝仏に供養を捧げた神々が、大通智勝仏に向かって言った言葉です。「わたくしども」とは、その神々のことです。

いつの頃からか、仏さまに帰依する人々が、「わたくしども」を自分たちのこととして、この経文を唱えるようになりました。

2. 「此の功徳」とは

(1) 「此の功徳」とは「仏さまを供養した功徳」です。

供養には「利供養」「敬供養」「行供養」がありますが、ここでは「行供養」のことです。

(2) 「供養」とは

供養というのは、感謝の真心を形に表した行為です。感謝がほんものであれば、必ず形に表れるものです。形に表れない感謝は、ほんものではありません。

(3) 三つの供養

① 利供養

仏さまにお花をあげたり、お供物をお供えしたりする供養。

② 敬供養

仏さまを礼拝し讃歎する供養。

③ 行供養

仏さまの教えを真心から受け取り、実践し、修業する供養。

3. 普く一切に及ぼし

「普く一切に」とは、自分・他人・世間のすべてにということです。

自分・他人・世間のすべての人々が、仏の教えを実践し、真の人間として生きて欲しいと願っているのです。

4. みんなおなじように仏の境地にたっしたい

みんなが仏の境地にたっすれば、生かされ合い、生かし合いの世界が現実のものとなるでしょう。これが本当の意味での、人間らしい幸せのありかたです。